



《Spiraea cantoniensis》2023年 ©Nerhol Courtesy of Yutaka Kikutake Gallery Photo by Yosuke Torii

## 館長のつれづれコレクション案内

# 作品から伝わる作者の身体性



## 李禹煥「刻みより」

木(米松) 179.0×114.5×3.0cm 1972年

李禹煥氏の作品を、弊館は29点所蔵しています。2022年に国立新美術館で李氏の回顧展が開催され、60年にわたるしごとが跡づけられました。1970年代に始まる「点より」「線より」のシリーズの重要性は揺るがないという印象を受けました。木の板の表面に、鑿のように方形の削り痕を残す鋭利な刃物で幾度も刻みを入れた「刻みより」も、それらと同時期の一点です。作者の力が鑿を通じて板の硬さとぶつかり、板の反発に抗しながら鑿が運ばれた痕跡の集積が作品となっています。

ところで、この作品は彫刻でしょうか。美術の分野で一般に行われる絵画、彫刻といったジャンル分けに弊館もなっていますが、この作品は確かに「刻」んで作られてはいるものの、平面性も強く、ジャンルにおさまりがたい作品でもあります。

そもそも、現在、一般的と思われるジャンルは、明治時代に万博などの海外の展覧会に日本が出品するようになってから、主に欧米の分類を参考にして出来上がってきたものです。明治政府が最初に参加した万博は1873(明治6)年開催のウィーン万博でした。「美術」という言葉が生まれたのも、この万博の出品要綱を日本語に訳す時であったとされています。「美術」という言葉に「西洋ニテ音楽、画学、像ヲ作ル術、詩学等ヲ美術ト云フ」という割注があり、当時は、彫刻という言葉はなく、「像ヲ作ル術」とされていたことがわかります。「美術」という翻訳語は、欧米の博物館・美術館を巡遊した経験を持つ人々によってつくられたとされ、おそらく「像ヲ作ル術」も、欧米の主に大理石やブロンズを素材とする人間や動物の像が含まれることを踏まえたものでしょう。興味深いのは、

1877(明治10)年に開催された第1回内国勸業博覧会の「美術」の分類に「彫鏤」という分野があり、仏像、人物像などとともに手彫りの机の脚、傘の柄、版木なども出品されていることです。当時の人々は、作り手が用いる技に注目していたようです。その後、西洋美術の情報が豊かになるに当たって、「彫塑」「彫刻」などの類語の間で揺れ動き、戦後にインスタレーションなども登場してこれらの分類の境界があいまいになっていきます。

「刻みより」はジャンルの境界が曖昧になり始めた時期の作品です。この頃、李氏は、様々な素材に様々な道具で作者が行為の痕跡を残すことに興味を持っていたようです。たとえば、すでに高い評価を得ているシリーズ「点より」は、青や朱などの単色の色料を用いて、矩形に見える点のある方向性を持たせて表す作品ですが、各点に作者が筆を打ち込み、徐々に力を抜いていく跡が、色料の盛り上げと色の濃淡で表され、作者の身体性が感じられます。「点より」は色料を載せていくことでの表現、「刻みより」は削っていくことでの表現で、方向性が逆ですが、物と人間とが道具を介して衝突、拮抗した跡が作品化されているという共通性があります。李氏は、「芸術家を生よりも深いところで制作にかりたてるものは死である」(\*)と記しています。思えば、どの作品においても、作者の制作当時の身体も今はなく、制作時の作者の身体と行為の痕跡として作品が存在しています。「刻みより」のように、何かのかたちを思わせない作品は、作者の身体性を直接に見る者に訴えてきます。

【館長 山梨絵美子】

※【LEE UFAN】(美術出版社 1986年)カバー表紙裏より

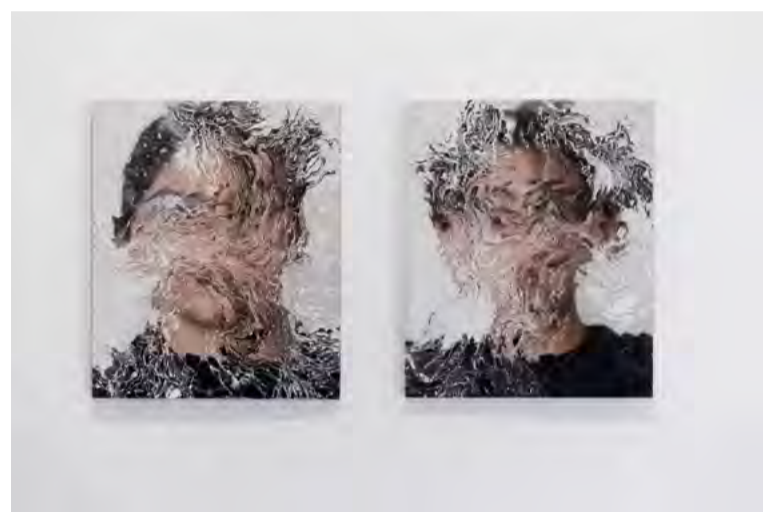


# Nerhol 水平線を捲る

## アーティストインタビュー

—はじめに、Nerholの作品について伺います。どのような手法で、どのような作品を制作しているか、あらためてお聞かせください。

**飯田** Nerholは、“時間を封入した半立体の作品”をつくっています。手法としては連続写真や映像のキャプチャ画像を時系列に積み重ねて素材とし、それを彫っていきます。そうすると、層のあいだから図像の動きが見え、時間が生み出す形のズレや空間の歪みが一つのイメージとして定着していくんです。絵画とも立体ともつかないような作品をつくっている、というのが一番わかりやすいかもしれません。



〔Interview / Mr. Isao Pastelin〕2024年  
©Nerhol Courtesy of The AMMA Foundation Photo by Daisuke Shima Photography

—お二人はそれぞれ個人でも活動されていますが、Nerholとしての活動はどのように進めているのでしょうか。

**飯田** ふだん、田中はグラフィックデザイナーで、僕は彫刻をメインにした作品をつくっていますが、Nerholでは対話をしながら制作することをとても大切にしています。作品の作り方から、イメージ、コンセプトなど、すべてのことにおいて対話を通して共有し、検討し、作品を制作しています。それぞれ出自が異なるので違った分野の言語を使っているのですが、“素材として「紙」を使っている”“作品制作に取り組んでいる”といった共通点があるので、根幹の部分で響き合うところを掛け合わせて活動しています。

—タイトルの「水平線を捲る」には、どのような意味や思いが込められていますか。

**飯田** 今年の3月、メキシコでの展示のために現地に行った際、長い時間飛行機に乗っていたんです。飛行機の窓から外を見ると、地球が丸く見えるじゃないですか。水平線や地平線が丸みを帯びて見えています。それから、飛行機で何度も時間をまたいで、1日1日の“区切り”を意識するようになったんです。時間はつねに流れていて、日が暮れたり眠ったりすることで区切りがあるように感じているだけなんですよね。けれど一方で、そういった区切りを日常的に体感しているからこそ、本来は区切りなんて“ない”と知ることができるというか。自分たちは、時間を顕在化させたり、時間との隔たりを生んだりするような作品をつくっているけれど、そういった作品こそが時間を超えていくのではないかと思ったんです。

**田中** タイトルを決めるまで、時間はすごくかかりましたね。自分たちの作品は支持体が紙で、厚みがあって、その厚みが「時間」となって変化していきます。それを彫り起こしていくという行為は、身体的なものとしては明確にあるのですが、言葉にしようとするそう簡単には言い表せないところがあって。そういったときに、自分たちの作品がどれも「移動」という要素を含んでいると考えると、つねに“どこかからやってきたもの”や“どこかに向かっていくもの”を「捲る」ような行為をしているのかな、と思ったんです。



〔Sonchus asper〕2021年  
©Nerhol Courtesy of Yutaka Kikutake Gallery

「帰化植物」とは、自生地から日本国内に持ち込まれ野生化した外来種の植物です。これは帰化植物である「オノノゲシ」の写真を彫った作品で、身近な植物にも複雑な歴史があることがわかります。Nerholは、ポートレートや帰化植物をはじめ、歴史的なアーカイブ資料や写真家による記録写真など多様な領域に目を向け、モチーフを選びとっています。

—今回は初期作品から最新作まで、Nerholの活動を網羅的に知ることができる展覧会になりそうです。展示作品はどのようにセレクトしていますか。

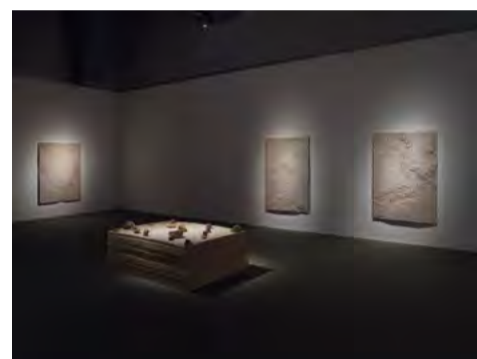
**田中** テーマとしては、「移動」という言葉が頭にあって、これまでに自分たちから大きく掲げたことはなかったけれど、実際にやってきたことはその言葉に集約されていると感じます。展示構成は空間ごとに区切ったまとめ方になっていますが、それらを「移動」という言葉をたよりに見ていくと、多層的に意味を拾える、考えられると思います。作品が、まさに水平線のようにつながっていく空間体験になるよう心がけていますね。

—本展に向けて、千葉にまつわる新作も制作されているとお聞きしました。

Nerhol(ネルホル)は、田中義久(1980-)と飯田竜太(1981-)により2007年に結成されたアーティストデュオです。「Nerhol 水平線を捲る」展では、Nerholが展開する多様な表現を、千葉の土地や歴史にまつわる最新作とともに紹介します。公立美術館での初の大規模個展に向けて、Nerholのお二人にインタビューを行いました。

**飯田** いま、千葉で採取した<sup>はす</sup>蓮を練り込んだオリジナルの和紙をつくっています。それが完成したら、作品をどんどん仕上げていく予定です。できあがった作品は、展示室だけでなくさや堂ホールにも展示する予定です。それから、先日千葉公園で開催された「大賀ハスマつり」で、大賀ハスを撮影しました。それも印刷して作品にする予定です。帰化植物のシリーズ、<sup>けいかくぼく</sup>珪化木のシリーズも新作を制作しています。

※珪化木:地中で長い時間をかけて珪酸が浸透し石化した植物



〔Tenjin, Mume, Nusa〕(太宰府天満宮宝物殿、2024年)展示風景より  
©Nerhol Courtesy of Yutaka Kikutake Gallery  
Photo by Yasushi Ichikawa

Nerholは近年、展覧会の開催地に関係する素材を練り込んだオリジナルの和紙をつくり、それを彫ったり、積み重ねたりして作品を制作しています。太宰府天満宮では、神事にゆかりのある麻を含ませた和紙がつけられました。

—同時開催で、当館のコレクションを使った展覧会も予定されています。

**飯田** 5月に開幕した太宰府天満宮宝物殿での展覧会でも、太宰府天満宮が所蔵する重要文化財などとあわせて作品を展示しました。今回は、千葉市美術館がもつ近世から現代までの作品と自分たちの作品と一緒に展示する機会がくれる、構成も考えられるということで、これまでとは違った見せ方ができるのではないかと思います。

**田中** 千葉市美術館のコレクションは、本当に良い作品がたくさんあります。また、知れば知るほど、自分たちの作品と先人の方々の作品には呼応する部分があると感じています。展示できることは、とてもありがたく嬉しいです。



〔Tenjin, Mume, Nusa〕(太宰府天満宮宝物殿、2024年)展示風景より  
©Nerhol Courtesy of Yutaka Kikutake Gallery  
Photo by Yasushi Ichikawa

太宰府天満宮宝物殿での展覧会でNerholは、太宰府にゆかりのある梅や麻をモチーフに新作を制作し、所蔵品と同じ空間に展示しました。制作年の大きく異なる作品たちが、時を超えて見事に呼応しています。

—さいごに、展覧会を通してどのようなことを期待していたり、楽しみにしていたりしますか。

**田中** ここまでまとまった作品を展示することがはじめてなんです。ほとんど初公開の過去作品もあります。以前から知ってくださっている方、部分的に見ていただいている方もいると思うのですが、全体を通して見ることで、どんな感想が聞けるのか楽しみです。それから、カタログができることも嬉しいですね。学芸員のみなさんや研究者の方に寄稿していただくことで、これまで自分たちでは文字にできなかった部分が、わかりやすく伝わる機会になるだろうと感じています。

**飯田** 来館者のみなさんに、ぜひ驚いてほしいです。それから、何回か足を運んでいただくと、さらに気づくことがあるのではないかと思います。ぱっと見て理解できる作品ではないかもしれませんが、作品の目の前にいると、さまざまなことを探ることができる。そういった作品になっていることが、たくさんの方に伝わってほしいと思っています。

〔取材日:7月17日、  
話し手:Nerhol(田中義久、飯田竜太)、  
聞き手:学芸員 庄子真汀〕



Photo by Sakiko Nomura

### Nerhol (ネルホル)

田中義久(1980年静岡県生まれ)と飯田竜太(1981年静岡県生まれ)により2007年に結成されたアーティストデュオ。紙と平面的構成によるグラフィックデザインを行う田中と、紙や文字を素材とする彫刻家の飯田からなる。2012年にポートレートシリーズを発表し、写真と彫刻の境界を往還する表現の独自性が大きな注目を集める。書物や印刷物、またそれらに記録された図像への一貫した関心から、二人の対話を重ねて選ばれたモチーフは、これまで人物や動物、植物、水や火、風景など多岐におよぶ。近年では、帰化植物や珪化木、アーカイブ映像やインターネット上にアップされたパブリックドメインの画像などを用い、現代的な視点から人間社会と自然環境、時間と空間に深く関わる多層的な探求を継続している。

「Nerhol 水平線を捲る」  
「Nerhol展関連 コレクション展」  
会期 2024年9月6日[金]–11月4日[月・祝]  
会場 8・7階企画展示室  
休室日 9月9日[月]、24日[火]、  
10月7日[月]、21日[月]  
※第1月曜日は全館休館  
詳細はホームページよりご覧ください







# 「つくりかけラボ15 齋藤名穂 | 空間をあむ 手ざわりハンティング Tactile Hunt Weaving Space」

アーティストワークショップ レポート

## 「手ざわり」でひろがる、私がみる世界とあなたがみる世界

[撮影:大倉英揮]

つくりかけラボ15では月に3回、齋藤名穂さんによるアーティストワークショップを開催しています。「手ざわり」から美術館の楽しみ方を多角的に広げていきます。7月のテーマは「企画展示室の作品の手ざわり」。その様子をレポートします。

### まずはウォーミングアップ

名穂さんが手がけた「さわる赤のコレクション(群馬県立近代美術館)」を使って、手ざわりから呼び起こされる感覚や感情を言葉にしてみます。



### みんなで企画展示室へ。作品の中に入りこんで、手ざわりを想像します。

「例えば、枝の部分。幹は太くてゴツゴツしてそうだけど、枝先はポキッと折れそうな感じがするなと思いました。また、空に月が出ていますね、この作品の中にはどのような空気が流れているか想像してみるのもいいですね。」名穂さんから手ざわりハンティングのコツを聞いたら、みんなで作品鑑賞。じっくりと、作品が描かれる世界の中に入りこんでいきます。



### いよいよ制作!

つくりかけラボに戻ったら、企画展示室で見つけたお気に入りの手ざわりをプレートの上に表現していきます。さまざまな素材の中から、つくりたいものに合うものを3種類に限定して選んでいきます。「ここで大切なのは“誰かにつたえる”を意識すること。このさわるプレートは“誰か”とのコミュニケーションのためのツールです」



### リフレクションタイム

出来上がったら、作品をみんなでさわって鑑賞します。ひとつずつ、隣の人に作品をさわってもらい、どんなさわり心地なのか、さわるとどんな気持ちになったかを聞いてみました。最後は展示台にのせて完成!完成した作品は、会期を通してつくりかけラボ内で展示されます。



### これからもイベント盛りだくさん!

- ◇アーティストワークショップ 8月21日[水]、22日[木]
  - ◇スペシャルワークショップ(立ち寄り式) 8月24日[土]、9月1日[日]
  - ◇関連イベント「なおさんとおしゃべりしましょ!」 9月14日[土]
- ※事前申し込み制のものがあります。詳細はホームページからチェック!

つくりかけラボ15 齋藤名穂 |  
空間をあむ 手ざわりハンティング  
Tactile Hunt Weaving Space  
会期 2024年6月12日[水] - 9月29日[日]  
休館日 第1月曜日  
会場 4階 子どもアトリエ  
観覧料 無料



### 次回予告 /



## 「つくりかけラボ16 金川晋吾 | 知らないうちにはじまっていて、いつ終わるのかわからない」

### アーティストインタビュー

[取材日:7月16日]

つくりかけラボ16では、写真家の金川晋吾さんをお招きします。金川さんは、自身の親族や同居人など身近な人々やその生活を撮影し、作品を発表しています。今回はどのようなプロジェクトになるのか、お話を伺いました。

——つくりかけラボの提案を受けた際は、率直にどのようなお気持ちでしたか。

いままでもワークショップは何度もやってきましたが、どれも“ワークショップ”として終わってしまうものでした。ですが現場では、やりとりや出来事などおもしろいことがたくさん起こっていて、それを、いわゆる作品というかたちではなくとも、どこかに出したい、参加者だけでなく第三者にも開いたものにしたい、とずっと思っていました。そういったことが、つくりかけラボでできそうだと感じています。

——今回はどういったプロジェクトを行う予定ですか。

まず、プロジェクトの主軸となるワークショップを開催します。ワークショップでは、自分が写っている写真を集め、展示する写真を選び、並べます。さらに、自分の写真や他者の写真を見て、思ったことや感じたことを書いていきます。そういった作業を、僕自身もやるし、参加者のみなさんもやります。今回、僕はファシリテーターという立場

ですが、どういことが起こるのか、どういことを思うのかは、やってみないとわからないですね。

——ワークショップのアイデアは、どこから生まれたのでしょうか。

まず、僕自身がセルフポートレートを撮っているので、自分が写った写真への興味がありました。それから、担当学芸員の庄子さんとの話のなかで、庄子さんの叔父さんが亡くなられた際、お葬式で生前の写真を20枚ほど選んでスライドショーで流した、ということを知って、とある人の人生について、かざられた枚数の写真を選ぶってすごく興味深いですよね。それを、つくりかけラボでやってみたらどうなるのだろうと思ったことがきっかけです。

——ワークショップにおいて、写真がどのように扱われていくかとても気になります。

ふだん、自分自身の姿を客観的に見ることはできないので、自分が写っている写真はとても新鮮に見えると思うんです。写真そのものもそうですし、写っている自分自身も“異質”なものとして見直せる気がします。それから、自分自身の存在は、生まれてからいままでひと続きのように感じますが、昔の自分はどこに行ったのだろう、と言われると不確かで、自分が本当に連続している存在

であるかどうか、といった違和感が、写真を通しておもしろく浮かび上がってくるのではないかと思っています。

——金川さんがワークショップをする際、大切にしていることはありますか。

まとまていない考えや、言いたいと思っていることを、できるだけ口にする環境づくりを心がけています。結果それは、うまく言葉にならないかもしれないし、うまく伝わらないかもしれない。けれど、説明できない状態でも口にする、まとまらないまま話し出せる、そういう場にしたいと思っています。実際のところ、そういった話のほうがおもしろいんです。会社じゃありませんね。

——さいごに、会期を通して、金川さんご自身に楽しみにしていることはありますか。

僕はふだん、自分自身のことを作品にしているのですが、やはり一人で考えていると自分の考え方の枠の中でしか考えられないんです。今回、みなさんとお話することで、自分では考えられないことを考えられるようになると思うので、それが楽しみです。新たな方法でコミュニケーションがとれるのではないかと、という期待がありますね。他人を通して自分を知りたいし、いままで出会ったことのない人と出会いたいです。



「日記をつける三ヶ月」より(主催:日記屋 月日)

### 【アーティストワークショップ】

会期中、金川晋吾さんを講師にワークショップを開催します。ご興味のある方はぜひご応募ください。

日時 10月20日[日]、11月9日[土]、30日[土]  
14:00~17:00(連続3回)

定員 6名(申込多数の場合は抽選)

対象 18歳以上

参加費 無料

参加方法 ホームページより申込

申込締切 9月20日[金]

※3回すべて参加できる方のみご応募ください。

※写真は会場に展示し、記録として撮影する場合があります。あらかじめご了承ください。

つくりかけラボ16  
金川晋吾 | 知らないうちにはじまっていて、いつ終わるのかわからない

会期 2024年10月12日[土]  
-2025年1月26日[日]

会場 4階 子どもアトリエ

観覧料 無料





# 美術館の仕事を紹介します！

その  
17

## 画像貸出

「C'n」vol.89では、海外への作品貸出の様子をお伝えしました。千葉市美術館では、作品貸出だけでなく、作品の画像の貸出も行っています。今回はその様子をご紹介します！

[テキスト：学芸員 田部井栞里]

### なぜこの仕事があるの？

作品の画像は、使うときに所蔵者や著作権者の許可が必要になります。そのため、千葉市美術館が所蔵する作品は、千葉市美術館が利用許可の手続きを行います。

申請の数は、一か月あたり6～9件ほど。1点の作品画像だけご希望の申請もあれば、50点以上の画像をご希望の申請もあります。

作品そのものを貸し出すのももちろん重要なことですが、画像を貸し出すのも同様に重要な業務です。なぜなら、画像がその作品の魅力を知っていただく契機となり、さらには展覧会や美術館自体に興味を持っていただくきっかけにもなりうるからです。広報と併せ、この作品がよりよく使っていただけますようにと願いながら、できるだけ早く、できるだけ質のよい画像をお貸し出しするように心がけています。

### どんな人に貸すの？

主に展覧会を開催する美術館・博物館のほか、出版社や編集者、テレビ制作会社、研究者の方々に対し、千葉市美術館が所蔵する作品の画像を貸し出しています。

当館所蔵の川瀬巴水《塩原おかね路》《塩原畑下り》《塩原しほがま》が掲載されています。



西山純子『新版画作品集 なつかしい風景への旅』(東京美術、2018年)



表紙に当館所蔵の北国克術《プラスチック・ボエム》が使用されています。

堀江敏幸『中継地にて 回送電車VI』(中央公論社、2023年)



田辺昌子『もっと知りたい浮世絵』(東京美術、2019年)

### 何のために貸すの？

展覧会の図録や論文雑誌に作品画像を掲載するほか、雑誌やテレビなどで作品を紹介する際に画像を貸し出しています。展覧会で販売するグッズも、この手続きを経て制作されています。

最近の例では、株式会社新潮社よりご申請いただき、竹久夢二《港屋絵草紙店》など5点の作品画像をお貸し出しました。これらの画像は、夢二の特集記事とともに『芸術新潮』7月号(2024年6月25日)に掲載されています。

誌面は4階びじゅつライブラリーでご覧ください！



芸術新潮2024年7月号

当館所蔵の歌川広重《東海道五拾三次之内 蒲原》《東海道五拾三次之内 庄野 白雨》が掲載されています。

### どんな風に貸すの？

千葉市美術館では、かつてはポジフィルムで作品画像を管理していました。現在、ポジフィルムのほとんどがデータ化されているため、画像の貸し出しもTIFF形式の画像を送ってやりとりしています。ちなみに、近年ではデジタル化が進み、新しく撮影する作品画像はすべてデータで管理し、データベースやアーカイブにも役立っています。

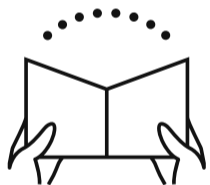
ポジフィルムの数々。量や劣化の課題があるため、スキャンをしてデータ化を行いました。



竹久夢二《港屋絵草紙店》のポジフィルム

### ポジフィルム

カメラに写真を保存するとき、今ではすっかりメモリーカードに取って代わられた写真フィルム。ポジフィルムもその一種で、色や明るさがそのまま写ることが特徴です。



## びじゅつライブラリーおすすめ本紹介コーナー 本をみる、美術をよむ vol.12 “本”と密接な関係を築くNerhol

Nerholの田中さんはグラフィックデザイナーとして数多くのブックデザインを手がけ、飯田さんは彫刻家として本を素材に個人の作品を制作しています。企画展「Nerhol 水平線を捲る」にあわせ、Nerholと本の関係を知る6冊をご紹介します。



「びじゅつライブラリー」とは、千葉市美術館4階にある図書室です。美術にまつわる親しみやすい本を、約4,500冊配架しています。ぜひふらっと遊びにきてください！

### Nerhol 『Phrase of Everything』



Nerholの初期作品にあたる、ポートレートモチーフにしたシリーズをおさめた作品集。モデルを3分間撮り続けた約200枚の写真を印刷し、積み重ね、彫る。そうすると、3分間のモデルの動きが「ズレ」となって表面に現れます。

### Nerhol 『Promenade: multiple—roadside tree』



2016年に金沢21世紀美術館で開催された展示の記録集。「roadside tree」とは街路樹のことで、Nerholは、輪切りにした木の断面の写真を積み重ね、彫刻しています。木は紙の原材料でもあり、Nerholにとって重要な存在です。

### 埼玉県立近代美術館編 『New Photographic Objects 写真と映像の物質性』



2020年に開催された、Nerholも参加したグループ展のカタログ。特徴的なデザインは田中さんによるもの。特製のボックスを開けると、作家ごとにまとめられた、サイズも装丁もさまざまな冊子が入っています。

### 飯田竜太 『I see, I can't see』



飯田さんの初期作品をまとめたアーティストブックで、デザインは田中さんが担当しています。飯田さんは、開いた状態の文庫本にカッターをあて、彫りをほどこす作品を制作しています。この手法がNerholの初期の活動につながっています。

### 『アイデア No.381 越境の遍歴 田中義久のパースペクティブ』



デザイナーとしての田中さんを大特集した1冊。ブックデザインからプロダクトデザインまで多岐にわたる仕事の数々や、デザイン関係者によるテキストなどから、田中さんが手がけた優れたデザインを知ることができます。

### DIC川村記念美術館編 『サイ・トゥオンブリーの写真—変奏のリリズム—』



2016年に開催された、同名の展覧会のカタログ。田中さんは美術館のカタログを数多く手がけており、これもそのうちのひとつです。グレーのクロスが美しい上製本で、写真集を多く手がける田中さんならではの静謐な構成が魅力的です。